

# イギリス喫茶文化と女性の役割

—日本の喫茶文化との比較を通して—

200164 竹中 美衣

## 序章

イギリスの飲み物といえば何が思い浮かぶだろうか。有名な産地が多いウイスキーやビールといったアルコール類を挙げる人もいるだろうが、紅茶もまた、イギリスの代表的な飲み物である。「紅茶大国」と呼ばれるだけあって、現在も多くのイギリス人が日常的に紅茶を飲んでおり、その光景はこれまで絵画や映像、文学作品など様々なものに映し出されてきた。

ところで、ある人たちが紅茶を飲んでほっと一息ついている様子を一度思い浮かべてほしい。その際、紅茶を飲む場所やシチュエーションは、人それぞれ想像するものが異なるだろう。しかし、多くの人が、その場で紅茶を飲んでいる人たちを「女性」でイメージしたのではないだろうか？実際に、近年日本でもアフタヌーン・ティが人気となり、「ヌン活」という言葉も流行しているが、アフタヌーン・ティを体験しようとホテル等に来訪するのは女性が多い。また、検索エンジンを用いて「紅茶を飲む人」のようなキーワードで画像検索をすると、女性が映し出されたものがほとんどである。これらの事象から、筆者は紅茶と女性の関係性に興味を持った。

そこで本論文は、イギリス喫茶文化における女性の関わり方を主題とし、茶と女性の結びつきが形成されてきた歴史的、文化的背景を考察していく。現代における茶の女性的な印象の強さは、女性が喫茶文化の発展に大きく関わってきたことに起因するのではないかと考えられる。そのため、イギリス喫茶文化が発展する過程で「イギリスの女性たち」がどのように貢献してきたのかを明らかにすることが、本研究の目的である。研究方法としては、イギリスで茶が飲まれるようになった17世紀から喫茶習慣が確立した19世紀までのイギリス喫茶文化に関する先行研究を用いた分析と、日本とイギリスの喫茶文化の比較分析を行い、イギリス喫茶文化における女性と茶の結びつきを検討していく。

本論文ではイギリス喫茶文化の比較対象として日本の喫茶文化を取り上げる。日本とイギリスは地理的に遠く離れており、両国の喫茶文化は一見相容れることなく発展してきたのではないかと感じられる。しかし、それぞれの国でよく飲まれる紅茶や緑茶は「チャノキ」という1つの植物が原料となって加工されたものであり、中国の茶がルーツとなって喫茶文化が始まったことなど共通した部分はいくつか見られる。一方、「茶」という共通の媒体を用いたそれぞれの文化は、国の風土や国民性、時代背景に影響されて築き上げられたため、異なった性質を持っていることも興味深い。したがって、日英の喫茶文化の比較を通じて相対的にイギリス喫茶文化の特徴を明らかにし、本研究で着目する喫茶文化における「女性の関わり方」の違いについても考察する。

第1章では、イギリスにおける喫茶文化の発展の歴史を、女性が茶に関与した時期や出来事に着目しながら整理していく。まず、茶貿易や茶税、消費量の変化といった茶の「流通に関する歴史」を確認する。つぎに、茶を消費する人々に注目し、茶が広まっていった様子や人々の茶に対する価値観の変化といった茶の「消費に関する歴史」を整理する。そして、イギリス喫茶文化における「茶会」という事象を取り上げ、茶会文化を代表するアフタヌーン・ティの特徴やその意義を検討する。

第2章では、日英の喫茶文化の比較を行う。はじめに、日本で茶が普及してきた経緯を整理し、イギリスでの茶の普及の歴史と比較する。つぎに、日本の茶会文化を代表する茶の湯を取り上げてその歴史と特徴を論じ、イギリスの茶会文化であるアフタヌーン・ティとの共通点や相違点を指摘する。最後に、日英の「喫茶文化史」と「茶会文化」を、ジェンダーの観点から比較し、イギリス喫茶文化における女性の茶への関わり方の特徴を明らかにしていく。

第3章では、イギリス喫茶文化において女性たちが茶と接点を持つきっかけとなった社会的な背景を考察する。はじめに、イギリス特有の社会構造である階級制度に着目し、上流階級と中産階級という特定の階級における女性たちの茶との関わり方や、喫茶に対する価値観を分析する。つぎに、人々に文化慣習の在り方を広めたメディアという存在に着目し、メディアが女性たちの茶の受容の際に果たした役割や影響力について論じる。最後に、当時の女性の家庭における立場や役割に焦点を当て、家庭での喫茶習慣との関連性を明らかにしていく。

なお、本論文では紅茶や緑茶など様々な種類の茶を、便宜上「茶」という表記に統一して論じていく。理由としては、喫茶の歴史を論じる際、具体的にどのような種類の茶が飲まれていたか、詳細に記すことが困難な場合があるためである。現在では、紅茶がイギリスの国民的な飲料に位置づけられているが、イギリスの喫茶の歴史において人々が飲んでいた茶は必ずしも紅茶ではなかった。英文学者の出口（2000）によると、輸入が始まった頃の茶はボヘア茶という半発酵茶で、ウーロン茶の系統の茶であった。また、喫茶文化が発展した時期である17世紀から19世紀のイギリスでは緑茶や、他の植物を混ぜた偽茶など多様なものがあった。本論では、茶の種類に着目した考察は行わないため、「茶」と書き記して論じていく。

## 第1章 イギリス喫茶文化の特徴

本章では、イギリスにおける喫茶文化の特徴を整理する。イギリスのこれまでの茶の歴史や茶に対する人々の価値観を明らかにすることで、イギリス喫茶文化をより深く理解できると思われる。はじめに、茶貿易や茶税、物流システムや茶消費量の変化といった茶の「流通に関する歴史」を確認する。つぎに、茶の「消費に関する歴史」を整理し、階級や性別というカテゴリーがイギリスの喫茶習慣にどのような性質を生んだのか、また人々の茶に対する価値観がどのように変化したのかを確認していく。最後に、イギリスの茶会文化であるアフタヌーン・ティの内容や目的を追究する。

### 第1節 イギリスにおける茶の普及の歴史①—流通面—

本節では、イギリスで茶が普及していった経緯を、供給面に着目しながら整理していく。イギリスは「紅茶大国」と呼ばれているが、茶の生産に適さない環境であるため海外からの輸入に頼っている。そのため、茶貿易や経済政策などの国を挙げた茶ビジネスから、小売りや物流など各地で行われる茶商売まで、あらゆる茶の供給に関する事象を分析することでイギリスにおける茶の普及の経緯を明らかにする。ここではイギリスに茶が初めて伝来した17世紀から19世紀までの歴史を確認していく。

まず、イギリスに茶が持ち込まれた17世紀の茶の流通について論じる。イギリスと茶の出会いは1630年代で、中国産の茶葉がオランダを経由して持ち込まれた。茶が初めて市販されたのは1657年で、重要な商取引が行われていたロンドンにおける「コーヒー・ハウス」という場所で提供が始まった。コーヒー・ハウスは、出口(2000)によれば「喫茶店」(p.28)のようなものであり、食文化史研究家のサベリ(2014)は「煙草の煙がたちこめる騒々しい場所」(p.108)であったと説明する。ここではその名の通りコーヒーの販売を行い、他にもココアや煙草、そして茶など、当時イギリスに持ち込まれたばかりの外来品を販売していた。そのため、コーヒー・ハウスは茶を含め様々な目新しい外来品を手に入れられる流行の最先端の場所であったと考えられる。コーヒー・ハウスは茶を人々に認知させる拠点として重要な役割を果たしていたのだろう。

そしてコーヒー・ハウスにて、茶は葉として販売されていた。また、経済学者の角山(1980)によると、茶は重さ1ポンド(約454グラム)当たり価格6~10ポンド(現在の約6~10万円)で売られていた。これは大変な高価格で、上流階級の人しか買えないほどであったという。また社会学者のビッカム(2022)は、17世紀の間はイギリスに流入する茶はごくわずかで、珍しい贈答品として扱われていたと指摘している。そのため茶がイギリスに持ち込まれた頃は希少価値が高く、手に入れられる人も限られていたと推察される。

次に、18世紀の茶の供給について整理していく。18世紀の茶の供給は、東インド会社の活躍によるところが大きい。1600年に設立された東インド会社は、18世紀に入って本格的な茶貿易を開始した。1713年、中国の広東がイギリス商人に開港されたことで、これ

までオランダ経由で輸入されていた茶は、イギリスに直接輸入されるようになった。英米文学者の滝口（1996）によると、1720年代には茶が中国からの輸入品目中第一位となり、富裕層の人々に茶が広まっていったという。したがって、東インド会社による中国茶の輸入体制の本格化をきっかけにイギリスへの茶供給が充実していくようになったと考えられる。そして18世紀には対外貿易のみならず、国内の茶ビジネスが発展したことも注視するべきであろう。ビッカム（2022）は、卸売業者が様々な地域の販売業者や小売店に茶を届けていったことで茶の流通が拡大し、さらに小売店の販売人も増加していったと論じている。そのため、茶需要の高まりに伴って茶の商売に踏み入れる人が増え、物流に関わるビジネスが活発化したことで、より多くの人々へ茶が届けられるようになったと予測される。

では、具体的に18世紀のイギリスにおける茶の流通にはどのような特徴が見られるのだろうか。ここではイギリス国内における茶消費量の数値を用いて分析していく。以下の表1は、歴史学者のHoh-Cheung & Mui(1968)による、1740年から1794年における1年ごとの茶消費のデータを基に筆者が作成した表である。便宜上、55年分の国内消費量のデータのうち、1740年から10年おきの国内消費量の変化を取り上げる。なお、この数値は合法的にイギリスに輸入された茶の消費量、つまり東インド会社を経由して消費された茶の量を表している。また、ポンドは重量を表す単位で1ポンドは約454グラムである。

表1 イギリスにおける18世紀の茶の国内消費量

年	イギリスの国内消費量 (単位: 1000 ポンド)
1740	1494
1750	2296
1760	3861
1770	8634
1780	7328
1790	16430

Hoh-Cheung & Mui (1968, pp.67-68) を基に筆者作成

表1からは、茶消費量の継続的な増加が確認でき、特に18世紀後半に爆発的な消費量の伸びがあったことが読み取れる。この増加を招いた1つの要因として、茶の価格の低下が考えられる。1757年、茶が中国の広東という唯一の港からの出荷に制限されると、東インド会社は膨大な量の茶を買い付けた。これによりイギリス国内に茶が過剰に供給され、価格が低下したことが予測される。その結果、多くの人の茶の購買が促進され、結果的に消費量が増加していったのではないだろうか。また、表1が示すように

1780年から1790年にかけて国内消費量が2倍以上に膨れ上がったことは注目すべき点であろう。この要因としては、1784年のピット首相（William Pitt, 1759-1806）による茶税の減税が考えられる。サベリ（2014）は、この減税によって茶税が119%から12.5%へと下げられたことで茶の価格が下落し、その結果すべての階級の人が茶を手に入れられるようになったと説明している。このような政府による大幅な減税の実施によって茶を買い求める顧客層は広がったのだろう。減税に伴う価格の低下は、イギリスの茶消費量の増加に大きく影響したと考えられる。

次に、19世紀の茶の供給について整理する。1834年には、東インド会社の独占供給体制が廃止されたことで自由貿易が始まり、茶貿易は自由競争になった。また、1853年に再び減税が実施された。これらの改革により茶の価格は安くなっていき、一層茶が身近なものになっていったのだろう。では、19世紀の茶消費にはどのような特徴が見られるのだろうか。以下の表2は、Statistics of the Consumption of Tea(1894)の統計データをもとに筆者が作成した、19世紀の茶消費に関する表である。表2は1849年から1890年までの約10年ごとの国内消費量の変化を示し、5つの項目は、(1)インド茶の消費量、(2)セイロン茶の消費量、(3)中国茶の消費量、(4)1から3の項目の合計消費量、(5)国民1人当たりの茶消費量を表している。なお、ポンドは重量を表す単位で1ポンドは約454グラムである。

表2 イギリスにおける19世紀の茶の国内消費量

Year	(単位: 1000 ポンド)				(単位: ポンド)
	(1) インド 茶	(2) セイロン 茶	(3) 中国茶	(4) 合計	(5) 1人当たり消費量
1849	-	-	50022	50022	1.81
1859	-	-	76304	76304	2.67
1870	13500	-	104051	117551	3.81
1880	43746	90	114485	158321	4.57
1890	101962	34516	57530	194008	5.17

Statistics of the Consumption of Tea (1894, pp.399-400)を基に筆者作成

表2の(4)合計消費量と、(5)1人当たり消費量に注目すると、19世紀後半のイギリスにおける茶消費量は、段階的に増加していったことが読み取れる。そして、18世紀の茶消費と異なる点として注目すべきは、イギリスで消費される茶のうち、インドとセイロンの茶が占める割合が大きくなっていることであろう。インドとセイロンはイギリスの植民地であり、19世紀後半から国内での消費が急激に増加していることが読み取れる。(1)のインド茶に関して、1870年にはイギリスでの消費が始まっており、1890年には(3)の中国茶を

超える量の茶が国内で消費されたことが明らかである。このような消費量の変化の背景には、19世紀におけるインドでの茶生産の発展が関係しているだろう。1823年にインドの奥地でアッサム茶が発見されて茶園の造成が始まり、1870年代から茶の植民地生産が本格化した。表2におけるインド産の茶消費も1870年には見られることから、この表はイギリスが主導した茶栽培の業績を反映していると言えるだろう。また、(2)のセイロン茶に関しては、インド茶にやや遅れてイギリスでの消費が始まっているが、1880年から1890年にかけて急激に消費量が増加している。セイロンでは、同時期にトマス・リプトンという人物が茶園の経営をはじめ、現代も有名なリプトン紅茶の販路を世界的に広げた。イギリスが植民地での茶栽培に取りかかったことで、一層国内での茶消費が盛んになったと考えられる。したがって、19世紀のイギリスにおける茶の流通の特徴としては、植民地産の茶が、イギリスでの茶消費量の大幅な増加をもたらしたことが挙げられるだろう。

本節では、17世紀から19世紀のイギリスにおける茶の流通の歴史を、貿易や税制度の改革、茶ビジネスの発展など様々な観点から整理した。そしてイギリスにおける茶の国内消費量を分析した結果、長きに及んで消費量が増え続けていったことが確認でき、消費量の増加は供給体制の充実や価格の低下に伴ったものであることが理解できた。

## 第2節 イギリスにおける茶の普及の歴史②—消費面—

前節では、17世紀から19世紀のイギリスで茶の流通量や国内消費量が増加していったことを指摘した。本節では、茶の消費量が増加した背景、すなわち茶の需要が人々の間で高まっていった当時の状況を時系列で追究していく。その際、階級や性別などのカテゴリーが茶の受容にどのように影響したかを分析し、イギリス喫茶文化の特徴を検討する。

まず、イギリスに茶が取り入れられた17世紀の人々の茶の受け入れについて整理する。前節で示した通りこの時代は茶の流通量が少なかった。出口(2000)は、17世紀中頃のイギリスでは内乱や疫病が発生し、一般庶民の暮らしは豊かなものではなく、茶へのアクセスは貴族や上流階級のごく一部の人々に限られたものだったと説明している。また滝口(1996)は、1660年頃までは農民の反乱や議会と王の対立が生じていたが故に人々が茶を楽しむ余裕がなく、茶は目立って流行しなかったことを指摘している。これらのことから17世紀に茶が世間に行き渡らなかった要因は、茶が貴重であったことに加え、社会情勢が不安定であったことだと考えられる。

では、イギリスで最初に茶を入手した人々はどのように受け入れていったのだろうか。滝口(1996)は、茶が人々に普及していくプロセスを見ると、「宮廷」と「コーヒー・ハウス」という2つの流行の拠点があったことを説明している。前節ではコーヒー・ハウスが人々に茶を広める重要な拠点となっていたことを指摘したが、富と権力を持つ宮廷でも茶が初期の段階から受け入れられていた。宮廷にはじめて茶を持ち込んだ人物として有名なのが、キャサリン・オブ・ブラカンザ(Catherine of Braganza, 1638-1705)という1人の女性である。キャサリンは、1660年に議会との衝突を終結させた国王チャールズ2

世 (Charles II, 1630-1685) の妃として、その 2 年後にポルトガルからイギリスの王室に迎え入れられた。経営実務研究家の土井 (2010) によると、キャサリンは嗜みの文化としての茶をイギリスに取り入れた人物である。キャサリンはポルトガルで過ごしていた時代からお茶好きで、茶道具を揃え、部屋の装飾にこだわりながら茶を楽しむ習慣を持っていた。実際にキャサリンがイギリス王室に持ち込んだ嫁入り道具には、茶に加えて当時大変貴重だった砂糖、中国製の陶磁器や日本の漆器、その他東洋の工芸品や家具調度が含まれており、これらを喫茶に用いていた。そのため、キャサリンにとって喫茶は趣味であったことが理解できる。一方のコーヒー・ハウスでは茶は薬として紹介されており、飲む際に茶器にこだわることは行われていなかったため、喫茶に美意識を求める文化はキャサリンが宮廷で行ったものが源流であると推察される。キャサリンの喫茶習慣を出発点として茶は上流階級の間でも親しまれ、やがてその噂は市民にも伝わり茶に関する人々の関心は高まっていった。これらのことから、キャサリンの興入りを機に喫茶習慣が広まっていったプロセスを確認することができる。

次に、18 世紀の茶の受容について整理する。18 世紀には女性たちが茶と接触する機会が多くなったことに注目したい。茶が広まる拠点となっていたコーヒー・ハウスは「女人禁制」であった。そのため宮廷にいる上流階級以外の女性たちは、しばらく茶を飲むことはなかったのだろう。しかし、18 世紀の最初の数十年で上流階級や中産階級の女性たちに喫茶の習慣が広がった (ビッカム, 2022)。それを後押ししたのが「ティ・ガーデン」であろう。ティ・ガーデンは 1730 年代に女性の集いの場所として出現し、週に 3、4 日程開催され、多くの人々でにぎわっていた。サベリ (2014) はティ・ガーデンを「一種の行楽地であり、出会いの場」(p.110) と説明する。図 1 のティ・ガーデンを描いた絵画を見ると、上質な服装を身に纏った女性たちが屋外で人々との交流を楽しんでいる様子が伺える。出口 (2000) によると、ティ・ガーデンの入場料はコーヒー・ハウスの 12 倍を要したため、参加できる女性は富裕層に限定されていたという。したがって、イギリスの女性たちが最初に茶を楽しむ場としての役割を果たしたのはティ・ガーデンであり、そこでは女性の中でも裕福な人々を中心に楽しんでいたことが推測される。



図 1 Vauxhall Pleasure Gardens. (出典：The Fitzwilliam Museum, n.d.)

また、18 世紀には茶は階級や性別を問わず多くの人々に手が届くものへと変化した。茶は、18 世紀中頃には中産階級へと広まり (サベリ, 2014)、イギリスの田舎でもかなり普及していた (滝口, 1996)。その要因としては、前節で言及したように東インド会社などの活躍により茶の供給体制が充実していったことが考えられる。では、当時の人々は茶のどのような面に魅力や必要性を感じ、受け入れていったのだろうか。滝口は、茶が人々に受け入れられた理由として、酔わない上に衛生上安心して口にできる飲み物であることを指摘する。茶が広まる前に人々が飲んでいたミルクや水、ホエイなどは衛生面の問題や不純物が混在する危険性があり、安全面が保障されていなかった。また、日常飲料として最も多く飲まれていたビールやエールといった酒類は、酔ってしまうという問題点があった。これらのことから、茶は他の飲料と比較してメリットの多い飲み物として人々に受け入れられていったと推察される。18 世紀はイギリスで産業革命が始まった時代であり、人々が効率よく働いたりよりよい環境を目指して議論したりする際には、安全で酔わない茶が歓迎されたと考えられよう。

さらに、18 世紀に多くの人々が茶を購入したのは、当時の茶に関する医学的な見解の後押しもあったのではないだろうか。滝口 (1996) によると、トマス・ショートという医師は茶の実験や文献調査を実施し、茶の効能を提示して飲茶を推奨した。また滝口によると、ジョン・レットスンという王立学士院の高名な医師は一般向けに書物を記し、茶を習慣的に取り入れることを推奨していたという。このような科学的な立場から茶の肯定的側面が世間に認識されたことで、人々の茶に対する信頼感が生まれ、より多くの人々が生活に茶を取り入れていったという経緯が推察される。そして、18 世紀は産業革命によって社会が急速に成長していった時代である。角山 (1980) は、18 世紀中ごろの農業革命によって豊作が続き、労働者の所得が上昇したことで稼いだお金を茶の購入に充てられる余裕がもたらされたことを指摘した。したがって複合的な要因により人々の茶に対する関心と購買意欲が高まり、茶が普及していったと言えるだろう。



次に、19世紀のイギリスの茶習慣について分析する。食文化研究家の岡谷（2005）は、19世紀初頭には貧困層の食卓にも茶が見られたことを指摘し、茶は「パンを喉へ流し込むための水分であるばかりでなく、食事の中の唯一の暖まるもの」（p.34）であったと論じている。このことから、19世紀には茶は誰もが手に入れられるものになり、日々の食事に不可欠な存在であったと伺える。したがって、17世紀から19世紀にかけての人々への茶の普及において、茶は上流階級から中産階級、労働者階級、そして社会の最下層まで、段階的に広まっていったことが理解できる。

しかし、茶が階級を超えて飲まれるようになる過程で、労働者階級以下の立場の人々が茶を飲むことに対し、難色を示す人もいた。経済学者の丹羽（2019）によると、19世紀初頭の多くの上流階級や中産階級の人々の間には、下の階級の人々が茶を飲んで贅沢をするのはよくないという見解があったという。これは、階級によって茶への認識に違いがあったことで生じたものだと考えられる。上流階級の人々にとって、茶は王室で嗜好品として飲む高貴なものであったことに加えて希少価値が高かったため、茶を所有することはステイタス・シンボルであった。しかし、上流階級にとっては格式高い茶が、労働者階級や貧困層が日常飲料として飲むものになったため、茶の保持によって権威を示してきた上層の人々は、誇りが損なわれた気持ちになったのではないだろうか。王室から始まった伝統的な喫茶文化が大衆に広まっていったことに対して上の階層の人々からの批判があったことは、階級制度が存在するイギリス独自の出来事だと考えられる。

一定の階級の人々が茶を飲むことに対する否定的な見解はあったものの、茶は次第に階級を越えて受け入れられていったのだろう。前節で指摘した通り、19世紀半ばには植民地生産が本格化したことで安価なインドの茶が輸入されるようになり、国内での茶消費量はさらに増加した。丹羽（2019）は、19世紀半ばには茶業者が「貧しい人々にとって茶は必需品」（p.42）という認識を持っていたことや、中産階級の間で「茶はよい労働者、信頼できる消費者、安定した社会そして健全な経済を作る」（p.43）という共通した考えが根付いていたと説明していることから、これまで否定的に捉えられていた下層階級の飲茶が推奨されるようになったことが推察される。

本節では、イギリスの喫茶文化が浸透していく17世紀から19世紀にかけての、人々の茶との接触に焦点を当て、茶は階級や性別を越えて段階的に人々に受け入れられてきたことが分かった。そして、その背景には第1節で触れた供給面の充実だけではなく、人々の間で茶に対する肯定的な価値観が成立したことが理解できた。

### 第3節 イギリスにおける茶会文化の特徴

本節では、イギリス喫茶文化の歴史の中でも、18世紀以降に習慣として見られるようになった「茶会」について論じる。茶会は、読んで字のごとく「茶」を用いて人々が交流をする場である。そのため、イギリスにおける茶会がどのような目的で開催され、どのような意味合いがあったのかを明らかにしていく。その際、イギリス茶会文化の代表例である

アフタヌーン・ティに着目し、その特徴を分析していく。

まず、18世紀の上流階級の人々が行っていた茶会の様子を考察する。図2は当時の茶会の様子が1720年に描かれた絵画である。絵画の中央にはティ・テーブルを囲む女性たちがおり、茶を飲む様子が描かれている。部屋は天井が高く立派な造りをしており、左奥の壁のくぼみには当時上流階級の間で流行していた室内装飾や鑑賞用の陶器のコレクションがあることから、女性たちは裕福な生まれなのだろう。絵画の右端には窓の外から男性2人が女性たちの様子をひっそりと見ている姿が映し出されているが、女性たちのおしゃべりの内容が気になっているのであろうか。テーブルには茶の他に飲食物は見られないため、当時の茶会はシンプルなものであったことが伺える。



図2 The Tea-Table (1720) (出典：The British Museum, n.d.)

18世紀初頭には、茶会は裕福な家庭に浸透していた。18世紀文学研究者の Ellis(2019)によると、下の図3の絵画には裕福な家族が茶の時間を過ごしている様子が描かれているという。絵を見ると、カップを持って茶を飲んでいることが分かる。そしてテーブルの上にはティ・ポット、茶の缶、蓋付きのシュガー・ボール、茶こぼしなどたくさんの茶器が置かれている。彼らの纏う服装には艶があり、Ellisによるとシルクの衣服をまとっている。当時、中国製の絹、陶器、そして茶の3つを所有することは、富を表していた(Ellis, 2019)。この絵画にはその3点が揃っており、彼らの日常の1コマを切り取っただけでも裕福な家族であることが判断できる。



図 3 The Tea Party (1727) (出典 : Ellis(2019), p.35)

次に、イギリス喫茶文化として有名なアフタヌーン・ティの歴史を確認する。前述の通り 18 世紀にも茶会が開かれていたが、アフタヌーン・ティは上流階級の女性であるアンナ・マリア公爵夫人(Anna Maria Russell, 1783-1857)が 1840 年代に始めた家庭内での喫茶習慣がルーツとなっている。アフタヌーン・ティは今でこそホテルで楽しむものとしてのイメージが強いが、当初はアンナがランチから 21 時頃のディナーまでの長い時間の憂さを晴らすために、自分の部屋で茶と軽食を摂る習慣であった。アンナは次第に女性の客人を自宅に招いて楽しむようになり、茶のお供もバター付きのパンを食べる程度であったのがケーキやお菓子を用意するようになっていった。そのためアフタヌーン・ティは、社会的な要素が加わり、より洗練されたものになっていったと考えられる。また、土井 (2018) によると、アフタヌーン・ティは上流階級の女性たちを中心に広まっていったという。その理由として、土井は、外に出歩くことが制限されていた当時の女性たちにとって、アフタヌーン・ティが数少ない娯楽であったために、多くの人に親しまれるようになったと分析している。そのため、当時の女性の境遇が喫茶習慣の受け入れを促進したと考えられる。これまで性別や階級に関係なく飲まれていた茶だが、茶会においては女性が中心となって文化が形成されていったのではないだろうか。アフタヌーン・ティの出現を機に、茶は女性が中心で楽しむものであるという印象が強くなったと推察される。

では、主に女性たちによって繰り広げられた茶会はどのような内容であったのだろうか。英国紅茶研究家の藤枝 (2013) によると、茶会の準備は、自宅で主催するマダムと、マダムの手伝いをするコ・ホステスの 2 人で協力して行う。また、土井 (2018) によると茶会を開く際に行う準備として、1) 招待客を決める、2) 部屋の装飾の準備、3) ティーセットの選定、4) ティ・フードの用意、5) リネン類の選択、6) 季節の花の揃え、7) 食前酒の用意が挙げられる。そのため、アフタヌーン・ティではただ茶を淹れるだけではなく、入念に準備するものだと分かる。また、食環境トータルプロデューサーの阪口 (2012) は、茶会の準備はマダムのセンスが試される場であると指摘する。阪口は、茶会で用いる茶やお菓子、食器、壁紙等

のインテリア、家具の配置などあらゆるものが洗練され、全体を見て調和がとれていることが重要であると指摘している。これらのことから、茶に加え様々な要素によって茶会が形成されることが伺える。

会場の準備が完了すると、客人たちは家に招かれる。藤枝（2013）によると、客人たちは最初にウェルカムサービスと呼ばれる 1 杯の茶をマダムに淹れてもらうという。その後サンドイッチ、生菓子、焼き菓子、そしてスコーンなどのティ・フードが順番にマダムによって取り分けられる。藤枝は、ヴィクトリア時代にはティ・フーズを食べきれないほどたっぷりを用意することが約束事であったという。これらのことを踏まえるとアフタヌーン・ティには手順や決まり事がある程度あるものの、マダムの創意工夫によって生み出される演出が重要であると言えるだろう。

19 世紀に流行した茶会の目的として、親交を深める他に、互いの品格を評価する場になっていたことは特筆すべき点であろう。マダムは会話を盛り上げる手段として、準備した茶葉や茶器を話題に取り上げて教養の高さを披露し（阪口, 2012）、客人たちは、マダムが茶会中にお茶を注ぐタイミングの良し悪しや客を楽しませる会話術があるかなどによってマダムとしての腕を評価した（土井, 2018）。当時の茶会は、茶を飲んで純粹に会話を楽しむのではなく、自分の高位を維持しようと気丈に振る舞いながら、他人の格付けをする緊張感のある場であったのかもしれない。また、美術史研究家の櫻庭（2011）は、茶会の目的はただ来客者と茶を喫することのみならず、家財である豪華な茶道具を披露することで富を表し、洗練された趣味を持っていることをアピールする意図もあったと指摘している。現代のアフタヌーン・ティが豪華で上品なものであるのは、当時の茶会で人々が権威や品格を誇示するために贅沢品を用い、エレガンスを追求してきたことが影響していると考えられよう。ビッカム（2022）は、茶が「ありふれた商品になり、消費者は流行の最先端にいるために新しい習慣を見つけなければならなかった」（p.78）と説明している。そのため、茶が貴重だった時代には茶の所有だけで地位や富を象徴していたが、茶が身近なものになると人々は茶を淹れる際に用いる様々なもので富を象徴し、それを見せびらかす絶好の場が茶会であったのではないだろうか。

そして茶会においてマナーのある振る舞いができるかどうかにも評価される。例えば、右手でティ・カップ、左手でソーサーを持つ作法が正しく、カップを持つときは親指と人差し指で取っ手を持ち、小指を立ててはいけない。このような茶会でのマナーは、食事におけるテーブル・マナーと同じく、上品さやスマートな印象を与えるものだと言えよう。19 世紀には、茶会が中産階級などにも浸透していく中で、上流階級の人々は彼女らにしか分からない茶会でのルールや決まりを作って差別化を図っていた（藤枝, 2013）。そのため、振る舞い方や話し方などあらゆる面で格付けがされるという側面を持っている点が、イギリス茶会文化における特徴だと言えるだろう。

本節では、18 世紀から見られるようになったイギリスの茶会は、社交の場であり、主に裕福な女性を中心に流行した喫茶文化の 1 つであることを明らかにした。そして、茶会は互

いを評価する場でもあり、人々は会場の装飾品や身に纏う衣服などで気高さや富を、そして会話の際には教養をアピールし、自らのステイタスを誇示していた。

本章では、イギリスにおける喫茶文化の歴史とその特徴を整理してきた。茶の供給に関しては、中国の茶葉をイギリスに輸入する貿易システムの確立や国内の物流の整備に伴って茶の流通が充実するようになり、人々の茶消費量も長期に及んで増加してきたことが明らかとなった。また、茶を消費する人も当初は一部の裕福な人々のみであったが、次第にステイタスや性別に関係なく多くの人々が茶を手に入れられる環境が形成されていった。そしてイギリスの茶会文化は女性が中心となって流行してきたことに言及し、茶会はステイタスや品格の評価を互いにし合う場であるという特徴があることを確認できた。

## 第2章 日英喫茶文化の比較

本章では日本とイギリスの喫茶文化を比較する。はじめに、日本に茶が持ち込まれてから大衆に普及するまでの歴史を、流通と消費という2つの観点から整理し、イギリスの歴史と比較していく。次に、日本の茶会文化として代表的な茶の湯の特徴を分析し、イギリスの茶会文化と比較する。最後に、日英喫茶文化をジェンダーの観点から分析し、女性の茶への関わり方における両者の相違点を指摘し、違いが生じた背景を追究していく。

### 第1節 日本における茶の普及の歴史—流通と消費—

本節では、日本に茶が持ち込まれたと言われている9世紀から、人々の生活に茶が浸透する14世紀頃までの期間に着目し、茶の供給体制や人々への普及の変遷という観点から日本における喫茶の歴史を概略的に整理する。また、日英の喫茶史を比較して共通点や相違点を指摘する。

日本において最初の茶の記録が見られるのは、815年の『日本後記』である。歴史民俗資料学者の中村(2015)によると、『日本後記』には日本で育てられた茶が毎年嵯峨天皇(786-842)に献上されていた旨が書かれており、朝廷内には茶園があったという。イギリスに茶がもたらされたのは17世紀であるため、両国の茶の歴史には数百年もの隔りがある。また、茶の生産という点に関して、日本では中国から茶が持ち込まれて間もなく、朝廷での茶生産が確認されている一方、イギリスで消費する茶葉は輸入に頼ってきていることも異なる特徴として挙げられるだろう。一方で共通点としては、喫茶文化の始まりは王室や皇室という国の権威的な立場の人々からであるという点が挙げられる。

1185年から1333年まで続く鎌倉時代には、中国の宋から帰国した栄西(1141-1215)が源実朝(1192-1219)に『喫茶養生記』という茶の効能や製茶法が記された書物を献上した。ここには中国の文献を引用した情報や、栄西が宋で見聞きした事柄が記載されている(中村, 2015)。日本文学者の末永(2021)によると、当時の庶民は茶を認知しておらず、一般的なものではなかった。そのため、平安時代に引き続き、鎌倉時代にも茶は高貴な身分に貢がれるものであったと伺われる。また、茶の生産は京都や奈良など限定的に行われていた。これらのことから、茶は日本に持ち込まれてから鎌倉時代まで長きに渡って珍しい品であり、一部の階級の人々のみが手に入れられる貴重なものであったと推測される。一方で、イギリスの喫茶習慣は17世紀に始まり、18世紀中頃には労働者階級にも茶が手に入れられるようになったことから、日本の喫茶文化の歴史に比べるとイギリスでは短い期間で人々に茶が広まっていったという特徴がある。鎌倉時代後期になると、茶臼や茶筌といった茶道具が登場し、茶生産は京都や奈良に加えて伊賀国や東国にも広まっていった。そのため、日本の喫茶文化は長い年月をかけて徐々に醸成されてきたと考えられる。

1336年から1573年まで続く室町時代は、庶民に茶が広まっていった時代である。茶消費が拡大した原因について末永(2021)は、茶の産地が広がったことで供給量が増加し、地方にまで広まっていったことによると指摘している。そのため、日本の喫茶文化において、

茶の生産力の発展が国内での茶の消費量増加に影響していると考えられる。日英の喫茶文化において、茶の流通量が増加したことで身分の高い人々から庶民にも茶が広まっていったというプロセスは、共通していると言えるだろう。しかし、茶の流通量の増加を引き起こした大きな要因が、日本では生産量の増加であり、イギリスでは輸入量の増加であるという違いが指摘できるだろう。

また末永（2021）は、茶に関する技術の保持は長らく公家や武家に限定されていたが、1336年から1392年にかけての南北朝期を通じて、下級僧侶が茶の知識や技術を身に着けて茶屋を開くようになったことを機に、庶民に茶のアクセスが開かれていったことを指摘している。そのため、14世紀の茶屋の出現によってより多くの人々が茶を入手できるようになったことが伺える。茶屋は、身分を問わず誰でも茶を手に入れられる場所であるため、その性質はイギリスのコーヒー・ハウスやティ・ガーデンといった閉鎖的な空間とは異なると言えるだろう。

本節では、9世紀から14世紀頃までの日本の喫茶文化の流れを整理し、イギリスの喫茶文化史との比較を行った。共通点としては、茶が地位の高い王室や皇族などの限られた人々から多くの一般庶民へと時間の経過とともに広まっていった点が挙げられる。相違点としては、国に茶が持ち込まれた時期や茶生産の有無、大衆へと茶が広まる期間の長さなどが挙げられる。次節では、日本で大衆に茶が広まった14世紀以降、茶会文化として出現した茶の湯を取り上げ、その歴史や特徴について論じる。

## 第2節 日本における茶会文化の特徴

本節では、日英の茶会文化の対比を行い、両国における茶会の特徴を分析する。具体的には、日本の茶会文化を代表する茶の湯を取り上げながら、第1章第3節で論じたイギリスのアフタヌーン・ティとの比較を通じて、共通点や相違点を指摘していく。

まず、茶の湯とは何かということを確認する。日本美術研究者のOkakura（1998）は茶の湯を、日々の忙しさから離れて複数人で飲食を共にし、心地よい時間を過ごすものであると説明している。日々の忙しさから離れるとは、具体的には茶室という専用の場所で時間を過ごすことだと考えられる。複数人で飲食を共にし、心地よい時間を過ごすことは、第1章第3節で示したアフタヌーン・ティの特徴と共通する性質であり、茶の湯は茶会としての側面を持つと言えるだろう。また、茶の湯では抹茶という特定の種類の茶を用い、一方のアフタヌーン・ティも必ず茶が用意される。そのため両国の茶会文化において、嗜好品である茶が中心となって参加者同士が交流を楽しむという基本的な枠組みは共通している。

しかし、茶の湯は茶会だけを行うのではなく、稽古という行為とも密接に関わっている。政治経済学者の宮内（2016）によると、茶の湯の活動は、「茶事」、「大寄せ茶会」、「稽古」の3つに分けられる。まず茶事に関して、彼女は「最も正式な茶道活動」（p. 86）と表現しており、昔から行われてきた茶会の形式であると説明している。茶事はただ抹茶と和菓子を頂く場ではなく、決められた順序やルールに従って様々な事象を楽しむ茶会であるため、茶

の湯に関する一定の知識や作法を習得した人々が参加の対象である。そのため、茶事と呼ばれる茶会に参加できる人は茶の湯の経験者に限定されると考えられる。一方で、大寄せ茶会は大衆を対象とした茶会である（宮内, 2016）。大寄せ茶会の例としては、公共の場にある茶室での茶会やイベントで出店する茶会があり、茶の湯の知識の有無に関わらず誰でも楽しめるといった特徴が挙げられるだろう。そして稽古は、点前という茶の湯を実践する際の一連の動作を身に付ける練習の場であり、弟子たちは茶の湯の先生に点前の指導をしてもらう。したがって、茶の湯は単に茶会を意味するものではなく、点前という礼儀作法を習得するために修練を積む行為も含めたものであると言えるだろう。また、稽古で身に着けた作法や知識は前述した「茶事」という正式な茶会で発揮することになるため、稽古は茶事への準備と捉えることもできるだろう。イギリスの茶会文化であるアフタヌーン・ティには稽古の時間はないため、修練性の有無は、両国の茶会文化における1つの相違点である。

次に、茶の湯の歴史について確認する。茶の湯文化史研究家の谷（2008）によると15世紀末には茶の湯の土台は出来上がっており、茶を飲むことに精神的な意味を見出すようになっていたという。前節では、日本で茶が庶民に広まったのは14世紀頃であったことを示した。そして、15世紀に茶会文化が発展したと推察される。イギリスでは、18世紀に茶が労働者階級の人々に身近なものになり、茶会文化が発展したのはアフタヌーン・ティが成立した19世紀である。したがって、大衆への茶の普及が起こってから茶会文化が流行するという流れは日英で共通していると言えるだろう。

16世紀には、茶の湯に先行して「茶数奇」と呼ばれる道具にこだわった特別な茶会が盛んに開かれた。茶数奇は町人や商人が中心となって開催され、彼らは財力を駆使して高級な中国の唐物を購入し、それらを茶会の道具として用いていた（谷, 2008）。そのため、日本の茶会文化の歴史を見た際に、最初に中心となったのは裕福な身分の人々であったと捉えることができ、イギリスの茶会が上流階級から始まったという経緯と類似していると言えよう。茶会を楽しめる人々が上の身分に限られていたことは、茶会での空間の演出の為に、特別な茶器や家具などを揃える財力が必要であったからだと考えられる。

茶数奇は次第に新たな性質を帯びるようになった。まず、茶を飲むことを通じて精神的に深い境地に至ることを求めるようになり、そのために茶を点てる順序である「点前」も考案された。点前は、抹茶を客人に振る舞うための一連の動作であり、かなり細かい動きまで決まっている点が特徴的である。例えば、道具によって持ち手が右手、左手、両手と異なり、道具の配置場所がどこであるか明確に決まっている。一方で、イギリスの茶会にはマナーへの強い意識があるが、点前のような確立された型は存在しない。そのため、日本の茶の湯文化の方が厳格に守られるルールが存在すると言えるだろう。

ついに茶の湯が完成したのは、16世紀後半である。茶室や道具が整備され、点前も確立された。そして、茶の湯に「侘数奇」（わびすうき）という価値観が取り入れられたことが重要な点であろう。侘数奇を主導したのは、千利休（1522-1591）という人物であり、茶に禅の思想を取り入れて茶の湯における美意識の価値観を形成した。侘数奇は4つの要素、



すなわち茶の湯の稽古である「執心」、人間としての修行である「禅」、茶の湯の情趣である「和歌」、道具の選択と調和である「目聞」で構成される(谷, 2008)。そのため、侘数奇の思想によって、稽古や修行など、茶の湯に学びの要素が取り入れられたのだろう。侘数奇は、茶の湯を修練として捉え、人間が理想とする境地へと達するべきだという厳かなものである。茶の湯の修練性は、千利休の思想が影響していると考えられる。また、茶の湯では千利休が唱えた「和敬静寂」という言葉が大事にされている。茶道裏千家 15 代家元の千(2014)によれば、和敬静寂の「和」は平和と調和、「敬」は互いに敬うこと、「清」は清らかな気持ち、「寂」は何事にも動じない気持ちを表している。この思想は図 4 に見られる、利休が設けた「にじり口」という茶室への小さな入口に表れている。にじり口から入るには、刀を刀掛けにかけて、腰をかがめて頭を低くしなければならない。どんな人でも頭を下げないと入れない構造にしたのは、茶室では人間の地位の上下や差別はなく、皆平等であるという精神があるからだと考えられている(千, 2014)。これらのことから、禅の思想に基づく人間的な成長が茶の湯の要点であり、その思想が点前や茶会に表れていると言えるだろう。



図 4 茶室のにじり口 (出典：公益財団法人京都市文化観光資源保護財団, 2013)

稽古や和敬静寂という言葉など、茶の湯には教訓性があるように感じられる。一方でアフタヌーン・ティには教訓性はなく、重点が置かれるのは、茶会で用いる装飾品による富の誇示や、振る舞い方や話し方などで気品や教養を披露し、ステイタスを誇示することである。また、アフタヌーン・ティでは皆が平等であるよりも、むしろ他人との権力や階級の差を見せつけることで、より高貴な人々との交流や、家格の維持を追求していた。したがって、茶の湯とアフタヌーン・ティという 2 つの茶会の目的や意義は異なると言えるだろう。

また、日英それぞれの茶会で用いられる道具の性質には、違いが見られる。和敬静寂という言葉が大事にされている茶の湯においては、道具が「調和」していることが重要である。例えば、道具を選ぶ際はいかに自然をありのままの状態に取り入れるかが肝心であり、道具

同士の性質がぶつかり合うことなく、全体のバランスが考慮される。また、季節の変化に敏感であり、時期に合った道具の組み合わせを考えることが重要視されている。これは、アフタヌーン・ティにも共通するもので、茶会で用いる道具の全体のバランスや、四季の花を装飾に取り入れたりすることが求められた。しかし、道具の格好に関しては、茶の湯では質素なものや柄がついていないものが多い一方で、アフタヌーン・ティは豪華で装飾に凝った道具を用いるのに重きが置かれることが指摘できるだろう。この違いは、両文化における茶会の意義や目的が異なるが故に生じたものであると考えられる。

本節では、茶の湯の歴史を時系列で追いながら、アフタヌーン・ティとの文化の比較を行い、共通点や相違点を指摘した。茶や菓子を用意して人々と交流するという基本的な枠組みは両国の茶文化において共通している。しかし、茶の湯には教訓性があり、自然へ溶け込むほどに質素なこしらえが重要視されているのに対し、アフタヌーン・ティでは自分の見栄や利益を追求し、豪華絢爛なほど評価されるという性質があり、両文化には異なる特徴があることが確認できた。

### 第3節 日英喫茶文化の比較—ジェンダーの観点から—

本節では、ジェンダーの観点から日英の喫茶文化の比較考察を行う。第1章でイギリスの喫茶文化を整理した結果、女性が茶に関わる場面として多いのは、茶を「嗜好品」として用いる際や、「茶会」においてであると思われた。本節では、特に女性の茶への関わり方に着目し、喫茶文化の中でも嗜好品としての茶の楽しみ方や、茶会という事象において、人々がどのように関わってきたのかを、日本とイギリスで比較し、相違点を明らかにする。そして、相違点が生じた要因がどのようなものであるかを、時代背景を踏まえながら検討する。

はじめに、日英の喫茶文化に関わってきた人物のジェンダーを比較する。まず国に茶を持ち込んだ人物は、イギリスでは17世紀の王女であるキャサリンという女性であり、日本では鎌倉時代の僧侶である栄西という男性である。つまりイギリスでは女性が、日本では男性が茶を国に取り入れたという違いを指摘できる。この2人の人物は茶を国に持参しただけではなく、喫茶を他者に広めるという役割を果たした。キャサリンは、上流階級の女性たちを中心に宮廷で茶の嗜み方を伝授し、栄西は時の将軍、源実朝に喫茶方法を教えた。そのため、それぞれの人物は、自分と同じ性別の他者を中心に喫茶文化を広めたのではないかと推察される。

つぎに、日本とイギリスの「茶会」文化の成立に携わった人物たちのジェンダーを確認する。イギリスのアフタヌーン・ティの歴史を見ていくと、女性の存在にスポットライトが当たった。アフタヌーン・ティを始めた公爵夫人のアンナ・マリアや、王室で茶会を積極的に開催したヴィクトリア女王 (Alexandrina Victoria, 1819-1901) などの身分の高い女性がイギリス流の茶会文化を作り上げてきた。一方で、日本の茶の湯は男性たちによって確立された文化である。茶の開祖と呼ばれる村田珠光や、その後茶の湯を大成させた千利休は男性で、現在でも彼らの功績は広く世間に知られている。したがって、それぞれの国の茶会文化の発

展に携わった中心人物のジェンダーに関しても、イギリスは女性であり、日本は男性であったと言えるだろう。

一方、日本の茶会文化である茶の湯は、16世紀に千利休が完成させてから様々な流派が誕生した。各々の流派では常に男性が権威的な立場に居座り、家元制度によって茶の湯が継承されてきた。家元制度とは、家元を継承した人物が階層のトップに立ち、一番下の入門部分から段階的に茶の湯の「型」を学んで身に着け、ステップアップをする階層制度である(谷, 2008)。谷は、家元制度によって型を正しく後世へと受け継ぐことが出来るという点が文化継承の面でメリットであると指摘する。茶の湯の一派である裏千家は、初代家元である千利休から現在の16代目の家元まで途切れることなく受け継がれてきたが、歴代の家元は男性のみであることは注目すべき点であろう。また、文部科学省公認の裏千家茶道の団体である「淡交会」の役員はほとんどが男性である(一般社団法人茶道裏千家淡交会, n.d.)。そのため、茶の湯の権威的な立場には男性が就いてきていることが分かる。

では、これまでの茶の湯には女性の出る幕はなかったのだろうか。谷(2008)によると、明治維新以降に女学校を中心に茶の湯が教育に取り入れられたことで、女性に茶の湯が広まった。教育の場に茶の湯が登場したのは、裏千家の11代家元である玄々斎(1810-1877)という人物が、次世代を担う若い人たちへ茶の湯を伝授する必要性を説いたからである。そのため、茶の湯の普及において16世紀から明治時代に入るまでの長い間は茶の湯人口はほとんどが男性であったが、明治期を境に女性の茶の湯人口が増えていったという特徴があると理解できる。女学校での茶の湯の稽古について、文化人類学者の加藤(2004)は、重視されるのは茶の湯の精神性よりも「作法」の習得であり、その背景には女生徒たちが将来、家庭の婦人として接客できるよう仕立て上げるという目的があったことを指摘している。これは当時、ステレオタイプ的な女性の理想の姿を、茶の湯を通じて身に付けさせようという目論見があったからだと考えられる。そのため女性への茶の湯の普及では、本来重要視されていた禅の心や和敬静寂の心構えよりも、点前の型を身に付けるという形式的な側面が重視されるようになったという特徴があると言えるだろう。現在においても、茶の湯は花嫁修業や堅苦しい場というイメージが持たれやすいのは、明治期に女生徒への稽古で作法が重視されていたことに起因するのではないだろうか。明治維新以後、茶の湯に携わる女性人口が増加したことで、茶の湯の存続や継承という観点からは女性修練者が貢献してきたと言えよう。しかし、茶の湯で功績を残した人々は男性であり、男性の修練者たちによって茶の湯文化が継承されてきたため、日本の茶文化において女性たちは長らく影を潜めてきたと考えられる。

本節では、日本とイギリスの喫茶文化をジェンダーの観点から比較してきた。それぞれの国において、喫茶文化の発祥や茶会文化の成立に携わった人物は、イギリスでは女性が、日本では男性が中心となってきたことが理解できた。また茶会文化の普及に関しては、権威的な立場の人が、同じ性別の他者を中心に文化を継承してきたという特徴が両国に共通して見られると推察された。

本章では、日本の喫茶文化が始まった9世紀から庶民に茶が普及した14世紀頃までの流れを整理し、茶が身分の高い一部の集団から多くの庶民へと広まっていったという点が日英の喫茶文化史の中の共通点であることを明らかにした。一方、茶の国内消費量の増加は、イギリスでは貿易の活性化が、日本では茶生産の充実化が後押しをしたという違いが考えられる。また、茶の湯とアフタヌーン・ティという茶会の比較を通じて、人々が茶会に参加する目的や意義が異なり、それに伴って装飾デザインの性質の違いも表れていることが理解できた。また、茶会においてイギリスでは女性が、日本では男性が中心となってきたと推察された。次章では、イギリスの喫茶文化においてなぜ、女性たちが喫茶習慣を取り入れ、茶会に積極的に関わってきたのかということ进行考察する。その際、17世紀から19世紀というイギリス喫茶文化が発展した時代の社会的背景を多面的に考察することで、より多くの女性たちが茶を飲むようになったきっかけを究明していく。

### 第3章 イギリス喫茶文化において女性が活躍した要因

前章で日英の喫茶文化を比較した結果、イギリスの茶会や嗜好品として楽しむ喫茶習慣において、女性たちの活躍する場面が多かったことを明らかにした。本章では17世紀から19世紀というイギリスの喫茶文化が発展していった時代の「女性たち」に焦点を当て、女性が茶に主体的に関与するようになった背景を3つの観点から考察する。はじめに階級制度に着目し、上流階級から中産階級へと茶が浸透していく際に、それぞれの階級の女性たちがどのように茶に関わっていたのかを分析する。次に茶の普及と同時期に人々に広まったメディアという存在に焦点を当て、女性たちへの茶の普及において果たした役割を検討する。最後に、当時の男女の関係性に着目し、女性の家庭内の役割と茶の関連性について追究する。

#### 第1節 階級別の女性たちの茶への関わり方

本節では、イギリス特有の社会構造である「階級制度」に着目し、階級の異なる女性たちがそれぞれどのように茶に出会い、受け入れていったのかを分析する。まず、茶に携わった上流階級の3人の女性に焦点を当て、彼女らがイギリス喫茶文化の歴史上、どのような役割を果たしてきたのかを論じる。そして、中産階級の女性たちがどのように茶を受容していったかを、中産階級に属する人々の当時の価値観に着目して論じていく。

はじめに、上流階級の3人の女性を取り上げ、彼女らの茶への関わり方を考察する。1人目は、キャサリン・オブ・ブラカンザである。第1章第2節でも指摘したように、彼女はポルトガルとイギリスの政治的な戦略を背景にイギリスの国王チャールズ2世に嫁がされたイギリスの王妃である。キャサリンは、1662年のイギリスへの渡航の途中、1杯のお茶を最初に要望した。そのため、イギリスに嫁ぐ前からキャサリンにとって茶は欠かせないものだったと考えられる。英国歴史家のJohnson(2013)によると、キャサリンはポルトガルで生まれ育ってきたため、イギリスでは言語や文化の違いによる困難があったが、夫から積極的に英語を教わり、イギリスの娯楽である乗馬やボートなどにも触れ、服装や食事もイギリスの慣習に合わせようとしていた。そのため、キャサリンは異文化であるイギリスでの生活スタイルに積極的に関わり、受け入れようとしていたことが伺える。また、キャサリンはイギリスの文化慣習に順応するだけではなく、ポルトガルで流行し、自らの趣味である喫茶を人々に伝授した。夫であるチャールズ2世に茶を勧めると、彼は茶好きになった。そのため、キャサリンは、イギリスの文化に慣れ親しむ努力をしながら自分の好きな喫茶の魅力を周囲に発信する、文化交流に長けた人物だと言えるだろう。第1章第2節で論じたように、キャサリンが宮廷で客をもてなす際に茶を振る舞ったことで、上流階級の人々は彼女を模倣し、喫茶習慣が広まっていった。したがって、喫茶文化の歴史の中では、キャサリンは上流階級の人々に茶の楽しさを広めた人物であるという評価が出来るだろう。

2人目の喫茶文化に貢献した上流階級の女性は、アフタヌーン・ティ文化の幕開けを担ったアンナ・マリアである。第1章第3節で指摘したように、アンナは装飾された自宅の一

室にケーキと茶を用意して女性客を招待し、茶会での交流を楽しむ習慣を始めた人物として知られている。そして、アンナはヴィクトリア女王と親交があり、1841年にはヴィクトリア女王を家に招いて茶のもてなしをした。土井（2018）によると、ヴィクトリア女王はアンナが開いた茶会での経験を基に王室主催の茶会を開くようになったという。このように、アンナはイギリス喫茶文化を彩るアフタヌーン・ティを始めたことに加え、人々に絶大な影響力を持つヴィクトリア女王にアフタヌーン・ティを伝えたという大きな役目を果たした人物であり、イギリスの喫茶文化に多大な影響を及ぼしてきたと言えるだろう。

3人目の上流階級の人物として、ヴィクトリア女王を取り上げる。彼女は、社会、経済、外交政策などのあらゆる領域において顕著に発展した時代に国を治めた人物である。前述の通り、女王はアンナからアフタヌーン・ティに招待されたことで、茶のもてなしを気に入り、王室で茶会を開くようになった人物である。西洋史学者の山岸（2006）によると、当時、女王は国民からの絶大な人気を誇っており、女王を含む王室一家は、中産階級によって模範的な家庭イメージを持たれていた。女王は即位から暫らくして結婚、出産を経験し、君主でありながらも妻や母としての姿を人々に示した。そのため家庭的なイメージのある女王は、中産階級の女性たちから尊敬の念と親近感を抱かれ、慕われていたと考えられる。そして、女王が積極的に茶会を催して喫茶習慣を人々に示したことを踏まえると、多くの人々が彼女に倣って喫茶習慣を実践するようになったという経緯が考えられる。したがって、茶を喫する習慣は、理想的な家庭を築き上げるために生活に取り入れるべきものとして人々に認識されたことで、喫茶習慣が浸透していったと推察される。

以上の3人の女性たちに共通することとしては、喫茶習慣を好んでいたということだろう。彼女たちは王室のしきたりとして押し付けられていたのではなく、主体的に喫茶に関わっていた。そのため、彼女たちが茶を喫する姿は多くの人々の目に新鮮に映り、優雅に楽しめる習慣として捉えられたのだろう。そして、彼女たちはみな個人的な喫茶習慣に留めず、茶会を催して周囲の人々を招待し、交流の中で茶の魅力の人々に伝授している。王妃や伯爵夫人、女王といった位の高い女性が好む喫茶習慣は、憧れの生活スタイルとして人々の目に映り、裕福な人々を中心に模倣され、親しまれるようになっていったと推察される。つまり、人々から崇められ、注目の的となる上流階級の女性たちが茶を好んでいるという事実があったことで、もともと異国の文化であり得体の知れない習慣であった喫茶は、世間で肯定的な印象が持たれ、多くの人々に広まっていったと考えられる。

次に、中産階級の女性たちの茶への関わり方について分析する。中産階級独自の価値観として「リスペクタビリティ」というものがあり、英文学者の佐久間ら（2002）はリスペクタビリティを「中流階級の人々が自分たちより上位の指導的階層に対して抱いていた敬意に根ざしたもの」（p.215）と説明している。つまりリスペクタビリティは、中産階級が上流階級の人々に持つ憧れや尊敬の感情であると捉えられよう。また文学者の田中（2005）によると、階級社会であるイギリスでは「上流気取り」（p.6）という特徴的な風潮がある。これまで指摘したように、イギリスの喫茶文化の歴史において、茶は一部の上流階級が嗜むもの

から、中産階級、そして労働者階級へと広まっていったという特徴が挙げられる。そのため喫茶文化が裾野を広げる際は、中産階級の人々の、上流階級のライフスタイルや暮らし向きに対する羨望の気持ちが作用していたことが予測される。つまり、中産階級の人々が、上流階級の喫茶習慣に対して「憧れ」の感情を抱いたことで、彼らの茶の購入が促されたのではないだろうか。

また、佐久間ら（2002）は、リスペクタビリティの価値観に基づいて中産階級が身に着けようとしたのは、きちんとした身だしなみや振る舞い、教養、そして客人へのもてなしなどが含まれていたと指摘する。これらは全て、茶会において必要とされたマナーであり、気品を示す手段であった。そのため中産階級の人々は、上流階級の人々との交流に備えてこれらのマナーを体得し、茶会の開催を通じて身に着けた振る舞い方や教養を発揮しようと試みていたのではないだろうか。中産階級の人々は上流階級の暮らしに近づきたいという願望があり、それを実現するための手段として茶が用いられていたと考えられる。

本節では階級制度に着目し、上流階級の女性たちが喫茶文化にどのように関わってきたのかを整理し、彼女らが人々に与えた影響を考察した。その際、上流階級の女性たちの喫茶習慣は、中産階級の人々に憧れの気持ちを生じさせ、結果的に多くの人々へと喫茶習慣が広まっていったことを指摘した。次節では、メディアという媒体が喫茶文化の発展において果たした役割に焦点を当て、メディアと茶、そして女性たちとの関係性について論じていく。

## 第2節 メディアの影響力

本節では、茶の普及に関わった女性とは別に「メディア」が茶の普及の際に与えた影響力を追究する。第2章第1節で日英の喫茶文化史を比較した際、イギリスではより短い期間で大衆へと茶が広まっていったことを指摘した。短期間でイギリス各地での茶の普及が実現したのは、情報伝達手段としてのメディアの役割が大きかったからではないかと仮定する。メディアに触れた人々や掲載された内容に注目し、メディアがどのように人々に喫茶習慣を定着させたのかを検討する。

まず、イギリスで茶が普及しはじめた時期のメディアの役割について論じる。歴史上、初めて茶に関する広告が出されたのは1658年に刊行された週刊誌で、広告主はロンドンのコーヒー・ハウスの主人であり、店で茶の販売を実施することを告知していた。さらに1660年には、トマス・ギャラウェイ（Thomas Garraway）という人物が茶の販売を始めの際に薬として宣伝した。したがって、茶が世間にほとんど認知されていなかった17世紀には、茶の販売業者たちが店で茶を取り扱っている旨を載せることで人々の関心を寄せようとしていたと考えられる。

次に、当時の人々が情報を得る手段について分析する。1694年に、出版物の検閲などを定めるライセンス法が廃止されたことで、新聞や視覚的広告、書物や論評などのあらゆる種類の紙媒体が大量に出版されるようになった（ビッカム, 2022）。そして、人々はこれらの媒体をコーヒー・ハウスで入手していた。角山（1980）によると、コーヒー・ハウスは

「情報交換センター」(p.34)のような機能を持ち、多くの紙媒体が用意され、人々はあらゆる情報を仕入れていた。来店する多くの人々の目的は新聞や雑誌等の刊行物を読んで情報を入手し、議論することであった。そのため、当時の人々がメディアに触れるのはコーヒー・ハウスのような公共の場であり、議論を通じて社会への関心を高めていたことが想像できる。

18世紀に生じた変化として、出版物が上流階級の読者だけを対象にする時代から、不特定多数の読者をターゲットにして量産されるようになったことが挙げられる(佐久間ら, 2002)。そのため、当時、メディアは階級を超えてより多くの読者層に情報を伝えられる手段として台頭していったと考えられよう。公共の場で読まれた情報誌は、次第に家庭にも持ち込まれるようになった。例えば18世紀前半に出版された『スペクテイター』(The Spectator)というエッセイ紙はコーヒー・ハウスを基盤に普及したが、やがて家庭の食卓で女性にも読まれるようになった(滝口, 1996)。『スペクテイター』を創刊したのはアディソンとスティールという人物で、滝口によると彼らがターゲットにした読者層は女性を含めた中産階級の人々であり、刊行の目的は人々に娯楽の在り方や知識を提供しつつ道徳的向上を図り、理想の生活像を示すことであったという。そのため、『スペクテイター』は女性を含めた中産階級の人々が抱く、上流階級の生活スタイルへの憧れを実現するための手引きとなっていたことが考えられる。

また、『スペクテイター』は茶に関する内容が記載され、女性たちが茶会で世間話をする場面や、女主人が茶を淹れる場面の描写がある(滝口, 1996)。そのため、読者は喫茶習慣に関する情報を『スペクテイター』から入手していたのだろう。さらに、茶が登場する場面に女性が描かれていることから、女性と茶の結びつきがテキストの中で強調されたと考えられる。その結果、女性という特定のターゲット層に向けて喫茶習慣の宣伝効果があったのではないだろうか。読者の女性たちは記事を読むことで茶に対する見識を深め、理想的な家庭を実現するために茶を購入し、喫茶習慣を取り入れるようになったと推測される。また、『スペクテイター』には投書することができ、女性たちは自らの意見や生活環境を他の読者に共有していた(滝口, 1996)。これらのことから、家庭に『スペクテイター』のようなメディアが取り入れられたことを機に女性たちは茶の嗜み方を認識し、投書によって他の家庭での喫茶習慣を把握し、茶への興味を掻き立てられていたことが考えられる。

次に、視覚的な広告が果たした役割について議論する。ビッカム(2022)は、18世紀の印刷技術の発達と、小売業の急速な成長が相まって視覚的な広告が盛んになったと論じている。小売業の発展に関しては、18世紀に茶の供給体制が整えられていく中で、茶の販売業者が増加したことを第1章第1節で示した。彼らはポスター等の視覚的な広告を用いて茶を販売していたと推測される。また、ビッカムは、食料雑貨商の広告の大半は茶に関するものであり、茶の広告で「お茶会に訪れた女性たちがある品物を称賛する架空の会話を描くのが常套手段」(pp.245-246)であると論じている。したがって、イラストなど視覚的な情



報によっても茶と女性は結び付けられることが多かったと推察される。

では、女性と茶が登場する視覚的な広告は、どのようなものがあつたのだろうか。図5は、1831年に刊行された雑誌に載せられたイラストである。ここにはある女性がティ・テーブルで優雅に茶の時間を過ごしている様子が映し出されている。茶器が一式揃えられていることや、女性が上質な素材の衣服を身に纏っていることから、裕福な女性が描き出されていることが分かる。この時代のあらゆる媒体に、図5のような女性が茶を嗜む様子が描き出されていることを踏まえると、女性たちは視覚的な広告に何度も目を通すことで知らぬ間に茶に親近感や関心が湧き、茶への購買意欲が掻き立てられ、茶を消費するようになったのではないだろうか。



図5 The author of “the undying one” (1831) (出典：The British Museum, n.d.)

本節では、喫茶文化が形成されていく過程において、人々への茶の普及にメディアが貢献してきたことが理解できた。イギリスの喫茶文化の特徴として論じた、茶が大衆化するまでの期間の短さは、多様な媒体が公共の場や家庭内など広範囲に行き渡り、茶を認識させる役割を持っていたことに起因すると考えられよう。また、定期刊行物である『スペクテイター』や、新聞に掲載されるイラスト等の視覚的な広告などによって茶に関する情報が人々に伝達されていったことも確認できた。その中でも、女性と茶が結び付けられた情報が人々の目に入り、女性たちの茶の購入や喫茶習慣の普及が促されたと思われる。

### 第3節 家庭における女性と茶

前節では、メディアによって人々に茶という外来品が認知され、女性たちも新聞や雑誌を読むことで茶の習慣を取り入れていった経緯があったと考察した。本節では、家庭の女性たちの性役割と茶との関連性について論じる。ここまで本稿では、イギリスの喫茶習慣は家庭内に取り込まれていったことや、女性を中心に楽しまれるようになったことを示してきた。そのため、当時の家庭での女性の過ごし方を分析することで、より女性と茶の繋がりを理解できると考えられる。本節では家庭に居ることが求められた19世紀の中産階級の女性たちのジェンダー役割を分析し、女性たちが置かれた立場や役割、そして茶との繋がりを明らかにしていく。

はじめに、中産階級の女性たちの家庭環境について分析する。英国ジェンダー研究家の山口(2006)によると、19世紀の中産階級にとって家庭は神聖な場所であった。それは本章の第1節で指摘した通り、ヴィクトリア女王の家族の在り方が国民の理想的な家族観を形成したことに起因すると考えられる。また、当時の女性の家庭内の立場について、佐久間ら(2002)は「女性の居場所は家庭」(p.183)という考え方が絶対視されたことを指摘し、山口(2006)は、女性は家庭において「無私の献身」(p.38)が求められたと説明する。当時、このような女性像に縛られて行動を制限されていた上に、男性優位社会であったために権利が抑止されていた女性たちは、生活する上で様々な制限を課されていたと考えられる。中産階級の女性たちは理想的な家庭観を実現するために自らの意思や欲望を犠牲にしながら生活していたのだろう。とりわけ、家に留まるという責務があったことで、外出の機会や他者との交流が少なかったと予測される。

しかし、そんな閉鎖的な環境で鬱憤とした日々を送る女性たちに楽しみをもたらしたのが「茶」という存在だったのではないだろうか。前述のように「女性の居場所は家庭」という価値観があり、家庭にいる時間が夫よりも長かった女性たちは、家庭で飲むものとして普及していた茶に、より長く携わっていたのだろう。また、イギリスの喫茶文化において、茶は日常飲料としての側面を持ちながら、嗜好品として飲まれるものでもある。茶を嗜む際には、ティ・カップやポットなどの茶器一式を揃えたり、部屋の装飾にこだわったり、季節の花を取り入れて空間を華やかにしたりするなど、あらゆる工夫を施して楽しむことが出来る。そのため茶の時間は、家庭を守る女性たちにとっての数少ない娯楽の時間になっていたと考えられる。

そして、喫茶は夫にも肯定された習慣であったからこそ、多くの家庭に浸透したのだと考えられる。山口(2006)によると、中産階級の男性は、女性を家事労働から遠ざけて立派なレディに仕立てることで、ジェントルマンとしての品格を表していた。当時の男性にとって妻のエlegantさは、自分の体面を保つための1つの要素であったのだろう。そして男性が求める立派なレディとは立ち振る舞いが上品で教養のある女性を指すと考えられる。それを女性が体現する手段が、喫茶習慣や茶会であったのではないだろうか。喫茶の空間を演出する家具や茶器には費用がかかるため、各家庭の生活のゆとりを表す指標となり、女性が

茶を嗜む際の振る舞い方は品格を測る基準となっていた。そのため、男性同士が互いの妻のレディとしての素養を「茶」への関わり方を通じて評価し合っていたのかもしれない。喫茶習慣は、家庭内に居続ける女性たちのささやかな楽しみであると同時に、中産階級の家格や男性の、ジェントルマンとしての品格を表すための手段として用いられたと考えられる。

次に、中産階級の女性たちの社会的な役割について分析する。前述の通りヴィクトリア期の女性たちは、家庭を守るために行動が制限されていたと予測されるが、時には女性も社交活動に参加し、家族以外の人々と関わる機会があった。山口（2006）によると、19世紀はコネ社会であり、家族を単位とした企業が多かったため、女性たちは知人の家への訪問やパーティーへの出席を通じて「ネゴシエーター」（p. 43）として社交の場での繋がりを作っていたという。女性たちは常時家庭内で過ごしていたわけではなく、目的を持って外の人々と繋がっていたと考えられる。また、山口（2006）は、社交術として女性は幼い頃からレディらしい物腰や教養などを教え込まれていたと論じている。当時の女性たちにマナーや教養の習得が求められたのは、家庭内での振る舞いのためだけではなく、家庭の外で開かれる人付き合いの場で発揮するためでもあったのだろう。

そして、女性は社交の場に出向くだけではなく、外部の人々を招いて茶会を開催することもあった。茶会を上品に行えると、主催した女性とその夫には、社会的地位の高い人々との繋がりを持てる可能性が高まり、ビジネスチャンスの獲得や経済的な上昇が期待される（ビッカム, 2022）。人々は茶会でお互いに品定めをすることで付き合う相手を決め、より上の階級の人々との繋がりを作ろうとしていたのだろう。山口（2006）によると、19世紀半ばになると社交は儀式化を極め、身に着けたエチケットを駆使して家の風格を維持しながら、ネットワークを築いていったという。社交の場である茶会では、女性たちは単に茶を飲んで楽しい時間を過ごすだけではなく、人脈を作って地位やコネを獲得するという狙いを持っていたと考えられる。つまり、茶会は人脈を広げて家格を維持、もしくは上昇させるという意図が生じる営利的な側面を持ち合わせ、それに女性たちが関与していたと推察される。

最後にイギリスの家庭における空間の使い方について検討する。これまで指摘したように、茶が当初飲まれていた場所は女人禁制のコーヒー・ハウスであり、時が経ってティ・ガーデンという女性も茶を楽しめる場所が作られるようになった。そして、このような男女別の領域は、公共の場だけではなく家庭にも現れるようになった。西洋美術研究家の糸（2016）によると19世紀の中産階級の家庭は、書斎やビリヤード・ルームなどの男性的な空間と、「ドローイング・ルーム」といった女性的な空間が存在し、男女のスペースが明確に分けられていた。したがって、家庭内の空間にジェンダーに応じた境目があったことで、男女間で異なる習慣の形成が促されたのではないかと推測できる。

では、男女でどのような過ごし方の違いが見られたのだろうか。阪口（2012）は、18世紀半ば以降の習慣として、ディナー後に女性たちはドローイング・ルームへと移動し、茶を飲む時間を過ごすようになっていったと指摘する。一方、男性たちは別の部屋でビリヤードをしたり酒や煙草を嗜んだりしていた。そのため、夕食後の時間は、男性だけ、あるいは女

性だけで過ごす場合が多かったのだろう。滝口（1996）は、茶が「家庭で、特に女性たちに好まれる飲み物になった」（p.51）と指摘しているが、空間が男女で隔てられたことで、女性たちは夕食後に茶を飲むことが習慣となり、その結果女性と茶の結びつきが強まっていったと予測される。つまり、空間における男女の区切りがあったことで、女性中心の喫茶文化が助長されたのではないかと考えられる。

本節では、中産家庭における家庭内でのジェンダー役割に焦点を当て、19世紀の女性たちが置かれた立場や役割を分析した。その結果、女性たちは娯楽目的で喫茶に携わるだけでなく、家格を維持するという使命を果たし、社交目的の茶会では上の階級の人々とのコネクションを作ることに尽力するなど、「茶」を通じて家庭を守る女性としての責務を全うしていたことを確認した。また、ジェンダー別の空間が家庭内に存在したことで、女性中心の喫茶文化が発展してきたと推察された。

本章では、17世紀から19世紀というイギリスの喫茶文化が発展していった時代の「女性たち」に焦点を当て、女性と茶が強く結びつけられてきた要因を論じた。喫茶文化において功績を残した有名な上流階級の女性たちは、世間に茶の魅力伝える役目を果たしたと伺える。そして、中産階級の女性たちは女王など茶に関わった上流階級の人物たちに尊敬や憧れの感情を抱いていたことから喫茶習慣を生活に取り入れるようになったと考えられる。また、当時のメディアには、茶と女性が描かれた絵や女性が茶を飲む場面を書いた文章があり、新聞や雑誌の読者には女性が含まれていたことが確認できた。そのため、女性たちはメディアを通じて茶に関する情報を得ていたと推測される。さらに、当時の女性たちの喫茶習慣は単なる娯楽ではなく、家格を維持したり茶会を開催して上の階級の人々とのコネクションを作ったりする手段であったことが理解できた。また、ジェンダー別の空間が家庭内に存在していたことで、女性中心の喫茶習慣が浸透していったと考えられる。したがって、イギリス喫茶文化は、当時の社会の体制や価値観の影響を受け、女性中心の文化として発展してきたと言えるだろう。

## 終章

イギリスの映画やドラマ、小説などの作品において、茶を飲む場面には女性が多く登場している印象を受けてきた筆者は、茶と女性の関係性に興味を持った。そして、茶との関わりが深い国がイギリスである。イギリスでは、茶が「国民的飲料」と呼ばれるほど、消費量が多く、皇室から庶民まで幅広い層に茶が愛されている。そのようなイギリスの喫茶文化において女性たちはどのように携わってきたのだろうか。本論文は、イギリス喫茶文化における女性の関わり方を主題とし、イギリスで喫茶文化が発展した17世紀から19世紀を通じて「イギリスの女性たち」がどのように貢献してきたのかを明らかにすることを目的とした。研究方法としては、17世紀から19世紀のイギリス喫茶文化に関する先行研究の分析と日英の喫茶文化比較である。

第1章では、イギリスにおける喫茶文化の歴史とその特徴を整理した。茶の供給に関しては、貿易会社の働きや国内の物流システムの確立によって茶の流通量が増加し、茶が入手しやすくなったことで、国内の茶消費量が増加していったことを論じた。茶消費に関しては、当初は一部の裕福な人々に限られていたが、供給体制が強化されて価格が安くなったことに加え、世間で茶に対する肯定的な評価がされるようになるなどの変化が起こったことで、次第に階級や性別に関係なく多くの人々が茶にアクセスできる環境が形成されていった。そして、18世紀ごろに始まったイギリスの茶会文化では、女性が中心となって流行してきたことに言及し、茶会はステイタスや品格の評価を互いにし合う場であるという特徴を明らかにした。

第2章では、主に日本の喫茶文化の特徴を整理し、日英の喫茶文化の比較を通じて、イギリス喫茶文化の特徴を相対的に評価した。日英の喫茶文化の歴史を比較すると、茶が身分の高い一部の集団から多くの庶民へと広まっていったという点が共通している。一方で、イギリス喫茶文化においては大衆へと茶が広まるまでの期間が比較的短いことや、イギリスでの茶消費の増加には、茶の輸入体制の強化が大きく貢献してきたという特徴があることを示した。また、茶の湯とアフタヌーン・ティという両国の茶会文化を比較した結果、それぞれの茶会は目的や参加者同士の関係性などが異なり、それに伴って空間のデザインや道具の格好に違いが表れていることが分かった。また、茶会においてイギリスでは女性が、日本では男性が中心となって発展してきたことを指摘し、文化に携わる主要なジェンダーの違いがあることが明らかとなった。

第3章では、イギリスの喫茶文化が発展していった時代の「女性たち」に焦点を当て、女性と茶が強く結びつけられてきた要因を、当時の社会的、文化的背景を考慮しながら論じた。まず、喫茶文化において有名な上流階級の女性たちは、世間で茶の魅力を伝え、結果的に多くの女性たちに喫茶習慣に対する憧れや理想を抱かせ、茶の普及に貢献してきたことを示した。そして茶の普及には、当時台頭していた新聞などのメディアも大きく貢献していたことを示した。新聞や雑誌の茶に関する広告には、茶と女性が描かれた絵や女性が茶を喫する様子が文章に記され、読者には女性が含まれていたことから、メディアによ

って女性たちの茶の購買が促されたと考えられる。さらに、当時の中産階級の女性たちは娯楽として喫茶を楽しむだけでなく、家柄を守るという当時の女性の役割を果たす手段として茶に関わっていたことが推察された。したがって、イギリス喫茶文化が発展していく過程では、女性と茶は生活の様々な場面につながりを持っていたことが明らかとなった。

以上のように、本論文ではイギリス喫茶文化における女性の関わり方に着目し、イギリスで喫茶文化が発展した 17 世紀から 19 世紀を通じて「イギリスの女性たち」がどのように貢献してきたのかを検討した。結論としては、イギリス喫茶文化を広める側と受け入れる側の両方において女性が主体的に関わってきたことで、女性と茶の強い結びつきが形成されたことを導き出した。そして、現代における茶の女性的な印象の強さは、イギリス喫茶文化において、女性が様々な面で関わってきたことに起因すると言える。具体的には、上流階級の女性たちによる喫茶文化の醸成と伝授、メディアの情報発信による茶と女性の結びつきの形成、そして家格を守るという女性の責務としての茶への関与など、あらゆる場面で女性たちが喫茶習慣を発展させた結論付けられる。

本論文では「女性」という観点に着目し、時代や階級を超えたイギリスの女性たちがどのように喫茶文化に関与したかを分析し、女性と茶の結びつきが形成されたプロセスを検討した点において意義がある。しかし、本論文はイギリスの 17 世紀から 19 世紀という特定の時代を対象とした喫茶文化を取り上げている為、それ以降の喫茶文化の変遷についての検討が必要であろう。具体的には、現代のイギリスにおける喫茶に対する認識の仕方を、ジェンダーや階級などの観点から調査することが、今後の研究課題である。

## 参考文献

- Ellis, M. (2019) The British Way of Tea: Tea as an Object of Knowledge between Britain and China, 1690-1730. In Craciun, A. and Terrill M. (Eds.), *Curious Encounters: Voyaging, Collecting, and Making Knowledge in the Long Eighteenth Century*. *University of Toronto Press*, 30- 53.
- Hoh-Cheung. & Mui, L. H. (1968) Smuggling and the British tea trade before 1784. *The American Historical Review*, 44-73.
- Johnson, D. (2013) The Life and Times of Catherine of Braganza. *British Historical Society of Portugal Annual Report*, 40, 5-34.
- Okakura, T. (1998) THE BOOK OF TEA. *Kodansha International*.
- Statistics of the Consumption of Tea. (1894) *Journal of the Royal Statistical Society*, 57(2), 399-400.
- The British Museum. (n.d.) Explore the collection. Retrieved December 25, 2023, from <https://www.britishmuseum.org/collection>
- The Fitzwilliam Museum. (n.d.) Vauxhall Pleasure Gardens. Retrieved December 25, 2023, from <https://fitzmuseum.cam.ac.uk/explore-our-collection/highlights/context/stories-and-histories/vauxhall-pleasure-gardens>.
- 一般社団法人茶道裏千家淡交会 (n.d.) 「淡交会の役員」  
<https://www.urasenke.or.jp/textc/tan/> (最終閲覧日：2023年12月25日)
- 岡谷慶子 (2005) 「イギリス人のティータイム—イギリスの食文化(I)—」『静岡産業大学国際情報学部研究紀要』7, 33-49.
- 加藤恵津子 (2004) 「ジェンダーをめぐる近現代の茶道言説：日本と欧米」『新しい日本学の構築：お茶の水女子大学大学院人間文化研究科国際日本学専攻シンポジウム報告書』5(1), 55-60.
- 桑和沙 (2016) 『美と大衆—ジャポニズムとイギリスの女性たち—』ブリュッケ.  
公益財団法人京都市文化観光資源保護財団 (2013) 「特集 京の茶室2」  
[https://www.kyobunka.or.jp/learn/learn\\_building/1763.php](https://www.kyobunka.or.jp/learn/learn_building/1763.php) (最終閲覧日：2023年12月25日)
- 阪口恵子 (2012) 「イギリスの伝統的な茶会を彩ってきた色」『日本色彩学会誌』36(4), 297-300.
- 佐久間康夫・中野葉子・太田雅孝 (2002) 『概説イギリス文化史』ミネルヴァ書房.
- 櫻庭美咲 (2011) 「ヨーロッパにおける磁器製茶器の発展—肥前磁器製茶器からヨーロッパ製のセルヴィスへ—」『周縁の文化交渉学シリーズ1 東アジアの茶飲文化と茶業』関西大学文化考証学教育研究拠点, 209-223.
- サベリ, ヘレン (2014) 『お茶の歴史』竹田円訳, 原書房.
- 末永星 (2021) 「日本中世の喫茶文化について—金沢文庫古文書を中心に—」『同朋文化』16,

- 同胞大学, 77-105.
- 千玄室 (2014) 『茶のこころを世界へ』 PHP.
- 滝口明子 (1996) 『英国紅茶論争』 講談社文庫メチエ.
- 田中朋子 (2005) 「西洋文化に影響を与えた東洋文化—陸羽からビートン夫人へ—」 『相愛女子短期大学研究論集』 52, 1-20.
- 谷晃 (2008) 『茶の湯ってなに?』 淡交社.
- 土井茂桂子 (2010) 「宮廷社交から現在に至る英仏両国における紅茶による社交文化様式の変遷」 『神戸山手短期大学紀要』 53, 99-110.
- . (2018) 「アフタヌーンティという外来社交文化商品の現状と展望」 『神戸山手短期大学紀要』 61, 55-78.
- 角山栄 (1980) 『茶の世界史—緑茶の文化と紅茶の社会—』 中公新書.
- 出口保夫 (2000) 『アフタヌーン・ティの楽しみ』 丸善ライブラリー.
- 中村羊一郎 (2015) 『番茶と庶民喫茶史』 吉川弘文館.
- 丹羽絹子 (2019) 「19世紀イギリスにおける茶消費と1853年税改正—国民的飲料としての茶市場の変遷—」 『歴史と経済』 244, 東京大学, 34-51.
- ビッカム, トロイ (2022) 『イギリスが変えた世界の食卓』 大間知子訳, 原書房.
- 藤枝理子 (2013) 『もしも、エリザベス女王のお茶会に招かれたら?—英国流アフタヌーンティーを楽しむエレガントなマナーとおもてなし40のルール—』 清流出版.
- 宮内壽美 (2016) 「文化人類学における現代茶道研究の軌跡」 『政治学研究論集』 44, 明治大学大学院, 85-100.
- 山口みどり 「ヴィクトリア期の家族観と女性—男女の領域分離論をめぐって—」 川村貞枝・今井けい編 (2006) 『イギリス近現代女性史研究入門』 青木書店, 36-50.
- 山岸裕子 「ヴィクトリア女王—「女性」君主であることの意義あるいは影響—」 川村貞枝・今井けい編 (2006) 『イギリス近現代女性史研究入門』 青木書店, 110-124.